特6
289

松坂縞好新機織

## ○第十八反

冬柿の色さへ見えぬ松坂屋の店い賑ふ客欵待列ぶ手代が口々ゑ小僧呼ぶ聲答ふる聲何を
打傍煙草の輪を吹く折からゑ店頭へおろそ鈑輿物徒士若黨い引俱れねど年紀三十
五六とも覺しき立派の武士が附添ひ輿物の扉を押開きて裡より出づる一個の婦人い年い
二八か二九からぬ大振袖の邸風徐々店へ入り來たるを其れを看るより手代傍い遁れ美人
吾が方へ虜ゑなーて他へいやらじと口を揃へて(手代)入らーは入らーは入らーはーいと猴が
餌と乞ふ景態ゑて進りゑ頭を低ぐれども見向きもやらず店ゑ上りずつと帳場へ打ち通れ
ば茲ゑ坐したる番頭金兵衛駭き顏ゑて兩手と突き(金)誰方樣がい存じませぬが御註文の
儀おれい三階へお通り下さるゝとも又い店ゑて御覽遊ばさるゝとも御隨意でい御座りま
するが此所い帳場で御座いますから(政)拙者い註文の品あつて參いたのでいおい當店の
手代傳七と申す者へ用向があつて參つた者だが其方い當店の番頭か(金)ハイ左樣で御座

います金兵衛と申して當店を主管致す者でゐ座います(政)然らば其方よ談じやうが拙者い下谷ゐ徒士町よ住む小林政之進と申すゐ直參よて是をに居るい拙者の妹よてはんと申す者だが近來兎角ふ多病ゆへ醫者の勸誘よより淺草代地邊へ出養生を致させ置さーわ當店の手代傳七と申す者と早晩情を通じ〳〵由にて妹い懇姪致ーたり武家の法あれば兩人とも手討ふ致そ筈なれど實い義理ある妹もゐ假令後日よ組頭より嚴責あるとも生命を斷つい如何よも慇然と存じ今日妹い勸當致し當店へ連れ來さりー事あれば然るべく傳七へ傳へて養育の事を賴むなり金兵衛とやら妹い確と預けたぞコリヤおはん何ゑ嘆く不義致せしい汝の不了簡身の振方い傳七と相談致せ拙者い直ぐよ歸邸すべしと立上らんとそる動靜よ金兵衛驚き須臾と留め(金)マア〳〵お待ち下さいませ承まとれば驚き入つたる傳七が不埒早速處置と附けますれば何卒暫時ゐ休息を願ひます承知在らせられまそる通り當店い伊勢よりの出店よて男子計りの事でゐ座いまそうらゐ嬢樣をお預り申すなどは中〳〵出來る譯ではゐ座いませぬ情願暫く〳〵ゐ猶豫を(政)如何さま男子計りもゐ預り惡いといふも道理ぢや然らば暫時待たうから如何樣にも妹の身の片附きのなるやう執計らつて呉りやれ(半)妾が淫行ゆゑお兄ィ樣へゐ心配をかけ濟みませぬと如何ーた譯か傳七どの〳〵事は諦められませぬと打去はれたる娘の擧動は嘘か實か白髮の金兵衛頻ゐ首を疊よもりつけ(金)左右く二階へゐ通りを願ひます、六三郎御案内をやうせ甚だ見苦ーう御座いますが何卒〳〵と强て二階へ揚げたる跡よてホッと息つき(金)ヤレマア飛んだ事が出來した者だコレ五平どん聞かしやつたら怪ーゐる次第ではないか傳七どんは如何ーました奥藏へ往つたと早く呼ばつーやい〳〵是れは如何ーたら宜からうか(五)モシ金兵衛さん如何の斯うのと云つて此店へ女を擔ぎ込んで來たは孰れ○にする計畫でせうから早く思ひ切つて出した方が江湖へばつとせぎに濟みませう(金)其れで濟む事あらふ前能く執計らつて下さい(五)宜うゐ座いまそ損料貸で威し込んで來た貧乏旗本追つ返すよ譯はゐ座いません併し先づ此位でせうせ(金)其れで承知とするだらうか(五)せぬと云つても其首は私が追つ歸へと方便ゞ御座いまそ(金)何分賴む〳〵と云ふ折からわ奥藏より立出づる傳七が(傳)金兵衛さんゐ用でゐ座いまそか(金)ゐ用どころかコレ傳七どんお前いマア飛んでもない事とする人だ

# ○第十九反

善惡を判つ憲法ゝ龍の口評定所と聞くなれど今日ふりかゝりし禍ひを云ひ解く事も難しゝある身の不品行と罵慾され邪正を分つ人もなく虎狼ゝ齊しき五平僧が巧計の罠ゝ陷りて店を逐れし傳七が道三橋ゝ投しかゝれゞ空さへ闇く雨もよふ往來あけれゞ獨言(傳)

の歳から本店ゝ奉公をして十五の春江戸のお店へ上りて後ゝお店の爲めを思ふゆゑ品行を慎み漸々と若イ者の取締ゝ登庸られて今年一歴辛抱すれゞ通ひ勤めの一人前然ゝ

ある時ゝ國の親父を呼び迎へてと思ふので何卒相應な嫁があらゞと心算の折も折去年の秋おとらと共ゝ大多喜の菊と觀ゝ往りた時闘らゞ出會た那のおはんゝ小林といふお旗本の娘なれど繼母の中が折りあゝゞ今ゝ代地ゝ分家をして世話する人が欲しいとのお虎へ話と眞實と思ひ自滅を招く此身の爲め惡魔なりとゝ夢知らず二月三月世話そるうち能く〳〵聞けば旗本の娘といへ那のおはんゝ元吉原の松田屋で喜瀬川と云つて娼妓脫りと知れてゝ中々怖氣立ち人を賴んで離縁の話と云ひ込んで見ると二百兩の離縁金をゞ渡して呉れろと本根を吹いた古狐馬鹿〳〵しゝ話をまとめゞ乘て置いたが吾の誤り今日乘り込んだおはんの体ゝ屋敷姿でそら〳〵しく特ゝゝ兄の政之進と名乘つた奴も同穴の狸野郎と思つたゆゑ面の皮をゞ引き削いてと直さの掛合をゝやうと云へと金兵衛どのと五平がゝ禁め綜あゞだてゝ暖簾の恥辱とみそ〳〵強迫と知りおがら二百兩を渡し兩人を歸したうへ吾へゝ今日から暇をやると無理な處置も大番頭の採配ぶりゝ左や右くと云へぬゝお店の規則ゆゑ是れゝゝ深い樣子があらうと心注きゝゝたれど何といふゝも那んな女ゝ關係たが此身の落度ゝ涙を呑んでお店を出でお虎を捉へてゞめあげたなら此奸計の發當人が顯れやうかと往つて見れゞ四五日前から何處へ往たやら行方も知れぬと近所の評判此うへゝ寧ろの事町奉行所へ訴へてと思つゝあれど然うしてゝお店の噪ぎとなるのみか倍々江湖へ傳七が胡慮となる事と諦め一旦國へ歸つたうへ本店へお詫をゝやうと心を決しなゞらも一歩の金の用意なけれゞ勝手を知らぬ道中へ踏出す事も氣ゝかゝり所詮此うへ苦勞をせんより死んで親父や本店の旦那樣へ申譯と覺期を極めて茲までゝ來たが諄々も三十年ゝ近き勤めの辛抱も一時ゝ破るゝ此度の災難便醫ゝいふ千日ゝ苅つたる萱の失策も元いと云へゞ一目見しおはんの色香ゝ迷つたゞつかり是れと思へゞ女ほど世ゝ恐ろし

きものゝあいア、慎むべきゝ此慾情前ゑ立たざる後悔ながら死んだら江湖の壯者のまた慰鑑ゑなる事もあらう其れを當世の思ひ出に六道あらぬ道三の橋から飛び込み然うぢやく〳〵と小石と袂ゑ拾ひ入れ落る涙と拭ひながら南無阿彌陀佛の聲ともゑ已ゑ斯うよと見えたる折しも側の柳の樹の蔭ゑ窺ふ男が飛んで出で背後の方より確乎留め(與)オットとつこい待ちなせい(傳)誰方ゥは存せませぬが如何か見逃がして殺して下さいませ(與)イヤ殺せねエ何んだか知らぬが諄言は背後で些つたア聽いたから何も死ぬゑやア及バねエ乃公ヤア神田の雉子町の與太郎といふケチな大工左右く乃公の宅へ來なせへ、コレサ、お前も壯年といふでも無エに飛んだ短氣お人だナヘマア氣を落けて聞なせへと力を極めて引仆せバ(傳)ア、モシ然う手酷く引き仆しなすつては痛う御座います(與)馬鹿云ひなせへ死ぬうといふ覺期で居て痛へ位ゑ駭くたア成るほど拉ィ等がお店者だナ

## ○第二十反

俚諺ゑ大奸は忠ゑ肖たりと松坂屋の惡手代五平と云へるゝ兼て同店の支配を己一個の手ゑ掘らばやと只管姦謀を施すものから未だ己より顔の古き主管金兵衛銀兵衛の外に源四郎傳七新助ありまた其他ゑ長九郎六三郎杯云へる者もあれど此二人は何時のほどわか乎撫け同意させーも彼の五人のみは眼の上の瘤なり然れど金兵衛銀兵衛と所謂愚直ともいふべき者ゑて是れを籠絡するゝ最と易く特ゑゝ六十有餘の年ゑて向後も知れたり只源四郎以下の三人を早く放逐んせと百般ゑ姦計を巧み竟ゑ先づ傳七を店より放逐したり一休是の五平ゝ屋敷廻りを擔當て諸屋敷へ出入りをするうち中根の娘ふはんゑ惚込み頻ゑ胸を焦すと雖も身分違ひの事も云ひ寄りて得心すれバ宜けれど若し腹立ちて父母へ告げられてゝ身の大事と容易に口へゝ出さゞりしゑ一年向嶋ゑておはんの一群が觀花の時測らず若黨權三郎と通じ居るとの噂さを聞き(當話一反ゑ觀す)去る淫行の所爲あるうへゝ其れを言立て己が慾をバ遂げんものをと思ふ折からおはんゝ權三郎とゝもゑ出奔し行方知れずとありしゆゑ宛然手の裏の珠を奪ゝれし心地せーが其後二年を經て吉原の松田屋ゑ登り喜瀬川といふ遊女を聘びしゑ是れぞ焦れしおはんゑして權三郎と逃げたる後小田原にて云々との物語をあー近頃當廓へ鞍替せーなれバ此末ともゑ憑ゑなつて給ゝれと以前のおはんと異りー手練巧計ゑ持ちかけらをて五平ゝ忽ち心蕩け竟ゑ身購し淺草代地へ

妾となして圍置きしが何時の程よりか情夫權三郎が立ち入る樣子を聞き知れど口へ出さぢ傳七を放逐す種となしたるうへ潔おはんを權三郎よ遣り彼の强迫の狂言を頼みふ權三郎へ早速承知し恁る事にて屈竟の甲州無宿三五郎今へ小林政之進を兄に仕立て松坂屋へ乘り込んだる爲め傳七へ永の暇よなつたるよぞ五平へ首尾能奸計成就し店より受取りし二百兩を四折よ頒けて自分へ更よ柳橋のふにつといふ藝妓よ馴染み頻りよ浮れ居たりしが再て是れよりへ源四郎と新助の兩人を放逐す種もやあらんと計畫居るうち其年の十一月店勘定の期よ近づきし或日五平へ新助を密よ土藏へ招き入れ(五)手堅いお前の事だから催促とするも如何だか實へ前年取替た五十兩去年の帳尻おへ如何か斯うか融通て置いたなれど今年へ些と都合もあるから一旦返して貰いたいがお前の都合へ出來まいかと云はれて新助首を搔き(新)誠よ延びて濟まおいが那の金よ就いてへ實よ口惜い事がある其譯といふへ(是より春吉よ欺られし事を語る)其んな事を云て斷るでへなけをど今暫く待つて呉れまいかと語るへ五平の思ふ坪(五)其れぢやアお前那の春吉の一件へ知らないの(新)春吉の一件とへ(五)那の女へ源四郎どんとへ人も知つたる深い中だ(新)エ、と驚顏色變へれば(五)ハ、ア其れで分つた事がある去年の冬長九郎どんの話しお源四郎どんへ大した色男だ春吉と馴あつて何處の手代から五十兩取つた想だと聞いたが其れぢやア其の手代といふへお前の事か何程色男だと云つても現在同じ店のお前ら金を取るとへ呆れた男だ此節聞けば源四郎どんの內儀が春吉の事から大チンチン度々噪ぎもあつたゆゑ內儀を離縁して春吉を內へ入をるとの事其樣な中を知らずよ五十兩と取られたへお前の手ぬけだが曲尺をする源四郎どんも朋輩甲斐のない無情お人だ(新)然うとへ知らず五十兩を欺き取られたのみならぢ婆々アと兩個が惡口雜言皆源四郎が敎たのであらう(五)オ、然其〳〵皆源四郎どんの吩咐でおらうがお前も男だ默言て居てへ意氣地があいせ(新)一寸の虫よも五分の魂五平どん何卒氣の毒だが五十兩へ今少し待つて下さい(五)然ういふ事なら長うへ待てぬお暮の仕切りまで延べして置かうと尙も煽動する折から店の方より手代小僧の來るを見るより兩人へ話を他よ分れけり

## 第二十一反

慶應二年三月猿若町の市村座よて興行の狂言へ傾城鏡山よして俳優へ市村家橘（當今の

尾上菊五郎）故人河原崎國太郎故人澤村田之助の一座よて傾城岩藤太夫と新造初菊の役よい家橘田之助が一日替りまた尾上太夫い國太郎が勤め初日以來の大評判よて出揃の後い一層增さりし客よ賣り切る桟敷土間是非一日の觀物をと春吉よねだられ源四郎い店の首尾して出かけさうへ同人とお虎の両人と連れ東の桟敷で見物の舞臺い既よ草履打の場なり（春）眞實よ毎見ても家橘い宜俳優ですチエ（源）近時い中々腕が宜くなつたがまた那の田之助の巧計よい咳いたものだ（春）然うでもチエ初菊い家橘より宜う御座いませうから今日い宜時來ましたオイお虎さんお前い芝居と見ずよ酒計り飲んで居るヨ（虎）姐さん御免なさい妾ハもう先刻よから那の岩藤太夫が憎くつて〳〵ならないでもから自狂酒を飲んで居るんです（源）那んなよ苛めると面が憎いやうだ（春）苛めると云へバお前さん新助さんい如何をましたらう（源）然うさ其後些とも便りを聞かないが何んでも淺草邊よ居るとの噂だ（虎）妾も去年から房州の方へ往つて江戸よいをらぬ此問歸つて來るとも傳七さんも新助さんもお店から暇よおつたとの事妾も春吉姐さんのお母アがお沒去だから此節手傳に參つて聞きましたが如何いふ失策があつたのでもチー（源）新助が暇よおつたのい知るまいが傳七の一件いお前と本所の大多喜さんい滿更知らないとい云へまいせ（春）新助さんよお暇の出たい五平さんから借りたお金の事だと聞きまーたが然うでもか（源）然うサ何んでも一昨年五十兩の金を五平から借りて去年の暮よい旁々返す筈を間違た處の大勢の中よてアノ五平が恰ど岩藤太夫が尾上太夫を苛めるやうよ手込めゐしたうへ大番頭へ告げ遂々店を放逐されだが其金の原因も何んだか女に與ゐた一件といふ事己い當日店に居ないかつたゆゑ執成をする事も出來ないかつたが誰かゞ詫をーてやれバ宜よ不人情極まつた朋輩サ（春）何んでもお店を出てから銀座の髮結床よ居たとの事でもが那の人も五十兩位の金で意氣地のない譯ですチー（源）傳七と云ひ新助が暇ゐなつたも如何やら五平の惡智惠らーいが那奴い中々油斷が出來ねエと話せバおとら春吉い顏見合せて（春）一寸御覽なさい初菊が岩藤よ返報を致ますヨ

## 第二十二反

先今日い是れ限りとうち出を太鼓の音とゝもよ芝居を出づる源四郎い春吉お虎と伴れ立つて茶店よて歸りの準備なー山の宿ゐ竢たせ置きたる家根船よ乘り込み漕ぎ下る船の裡

にゞ春吉が三味線手ゑ把り爪彈の聲も仇めく二上り新内

わたしが風ひいて寐てゐたら枕の側へそつと來てまゝでも喫ゐか藥いと其深切ゑ引き替へて今の邪慳いエ、マア如何したこつたエー

(虎)姐さんの聲い眞實ゑ男殺しだヨ(源)殺しと云やァ其新内は深川の藝妓己の吉が自作で大層流行つたものだ想だが藝妓の意氣地ゑふりつけられ絹商人の甚之助といふ者ゐ築地の波除稲荷の川で切殺されたと講釋師ゑ聽いた事があつて思ひ出した(春)其事は芝居でそると縮屋新助と藝妓三代吉と云て船の裡の殺しですねエ(源)然うとも〳〵何年であつたか小國次と菊五郎が演たは大當りであつたとの事だ(虎)新助が藝妓の己代吉を殺すも船の裡源四郎さんご春吉姐さんを殺そも船の裡同じ殺すといふ事でも憎〳〵つて切殺すと可愛くつて口で殺すと大層違つたものですねエ(源)またゐ虎が油ゐ掛るせ(春)船の裡で殺そその新助のと何んたか氣障だから其樣ゐ事はゐ廢しよ(虎)實ゐ妾が氣注かなつた姐さん御免ゐさいヨと仇めく話の其中ゑ源四郎は障子をあけ(源)春といい云へど夜風で寒いが最う何處邊ゑで歸つたちう(虎)然うですねエ船頭さん茲ゞ何處だネ(船)ハイ永代の

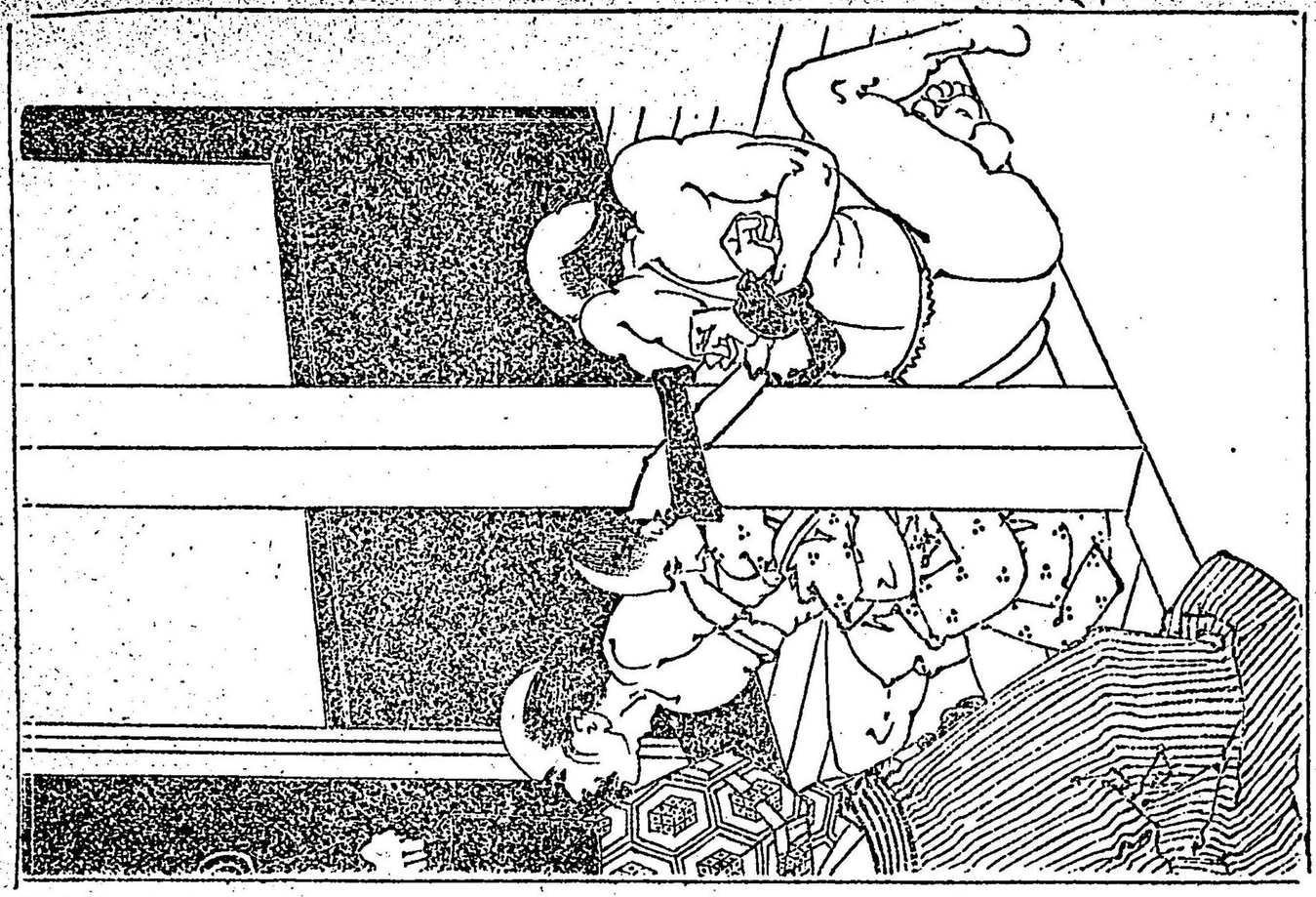


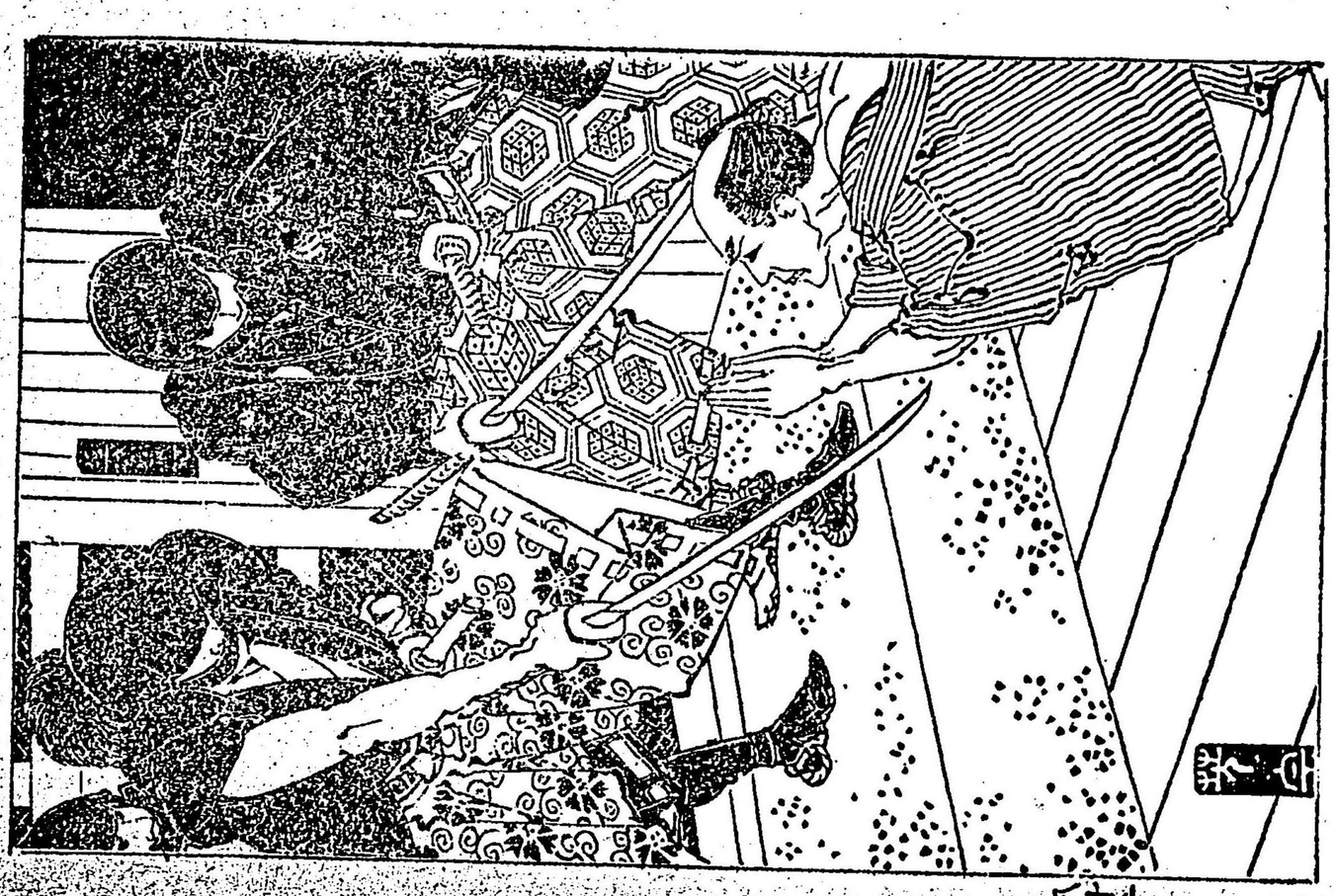
洲でそといふ折からゐ上手より頻りゑ該船を呼び立つれゞ(船)オヤ旦那エ上手から來る三挺が連りに當船を呼びやすせ(源)何んだ船を呼雖れたらう(春)ゐ店の衆が用でもあつて芝居まで出かけた歸りぢやありませんか(源)大方其んゐ事だらう」折から茲へ三挺ゑ聲をかけつゝ追ひ來たりし船を見るより家根船も漕ぎ止むれゞ立ち出づる一個の男は懷中より賃金與へて三挺の船を離れて此方の船へ乘徙しを堤燈の灯りゐ透し見駭く春吉(春)ヨヨゐ前は新助さん(虎)何んです新助さんだと實ゑコリヤァ新助さんだ(源)何んだ新助どんが來た、オ、新助どん如何して茲へ來のだ(新)他でもない命を貰いゑ來た(源、春、虎)エ、(船)其れぢやァ亂暴者か(新)エ、喧しいと腰に帶したる一刀扳いて船頭の脾腹を横に斫りつくれゞ苦と叫びて川中へ筋斗うつて落入つゝより夫れと見るより源四郎は身攝へなして油斷せぬ(源)命を貰ひゑ來たといふは己ゑ怨の事でもあつてか(新)春吉といふ化け猫と心をあわせて新助ゑよくも恥辱をあたへゝなと血走る眼ゑ朱を濺ぎ源四郎が辭は耳にも入れず今船夫を切りつけたる其血刀を振り翳せゞ三個は生たる心地はなく身を免れんゑも船の裡堪りかねて源四郎は舳先の方へ逃げんとそるをズット這入つて腰

の番ひを發矢と切れゞ迸しる血汐と見るより春吉は傍よあつたる煙草盆の火入れを把つて早速の眼潰しばつと立つたる灰煙りよ少し躊躇新助が手の下潜りて艫よ出づるを汝と逃がしてなるものかと眩眩みながら帶際を捉へて引けゞ黒繻子の丸帶解けて春吉は身と跳ーて井りと名も大川へ飛び入りて死生も知れぎなるを見て源四郎お虎は大聲よ人殺し〳〵と叫ぶわぞ新助は是れまでと所厭はで兩個の者を滅多切りさいあみホット一息源四郎の死骸を瞰遣り足下よ蹈へ(新)ヤイ源四郎汝が最期は自業自得人を呪ひし報は覿面お虎は怨なけれぞ止め立するより道伴れさせたが只春吉を取り逃がしたは諄々も殘惜だ併し女で此川へ落ては所詮助かるまい去年の暮れよ五十兩の金ゆゑ店を暇となり其れも汝と春吉ゆゑと其時のらして附覘へど好折からもあかつたが今日汝留のら家根船よて乘出ーたのを見つけたもゑ跡から屬て見度もあい芝居よ一日辛抱ーて遂々茲よて本望遂げたり是ぢで當世よ望もなければ俱よ流れの藻屑とあらんと軈て短刀咽喉よ突き立て其のまゝ川へをちあちの殘る浮名ぞうたてける元源四郎は毫も惡意ある者ならねど春吉が色香よ惑溺せーより竟よ五平ぞ姦計の術中ふ陷り新助の刄よ糧り死し新助もまた其の場を去らぎ命終りお虎は所謂傍杖の横死も傳七を欺むきし應報と云へゞ言酷に渉れど亦强慾無情の結果と云はんか獨り姦婦の春吉のみ未だ茲よは死生を知らず

## ○第二十三反

大厦の顚覆らんとする時一柱の能く支ふべきよあらず芝口一丁目ふ老舗たる松坂屋ゞ手代五平が毒舌よ眩惑され店を主管の金兵衛始め其他二三の管伴も邪正を照らもの眼鏡ゑく曩ふは傳七を放逐し未だ幾干あらざるよ復新助よ暇を遣り該兩人の後任よは五平を擧げしより今は主管人にも增さるの威權ゑりー折から暇を遣りー新助が源四郎とお虎を切害ー剩さへ藝妓春吉は水中へ陷入りて行方知れぎなりし事と切られあがらよ川へ投せし船頭ゞ逃げ歸り船宿へ報知同家よりは松坂屋へ急報せしよぞ同店の駭き大方ならぎ五平は直ぐに船宿へ出向き何分公邊沙汰よありては暖簾の恥辱ゆゑ如何やうわも內濟〳〵と此事ふ就いても多の金と出だー賄賂を以て諸役人の口を留め人夫を出ーて源四郎、お虎、の死骸を取片附しが新助の死骸と春吉の生死だけは更よ手懸あらざりき斯る噪ぎゐ松坂屋の店は漸次よ衰頽と招き手代丁稚よ至るまで其虛よ乘じ筆頭の融通私費の澁出より店





の勘定は不足勝よて本店よりの補費を云ひ送りしゐぞ重立ちたる者よ一應歸店せよとの返答ありて金兵衛銀兵衛の兩人は店を五平よ委ね出立ーたるは慶應二年六月中の事なりーが五平は兩人の不在を幸ひ大ゐ仕事をしたる上よて身を退かんと思ふよぞ兼て同腹中ある長九六三の輩人へ何か囁き謀合せぬ同月十五日は例の通り山王の神祭ゐるも將軍家御上洛中ゐ付き延引とはなりたれど大店向い店中のみ酒宴を張りて寐よ就きし其の夜も丑滿過る頃何處よりがは立ち入りけん黑の頭巾よ面を覆ひ眼ばかり顯す武士三個谷々拔刀手よ携へドカ〳〵押入り正体なく倒れ臥し居る手代小僧と蕣々縛りて土藏の前よ戰き怖る五平を嚇遣り(浪)ヤイ其方い當家の番頭か(五)サ、、、左樣で御座ります(浪)吾々い水戸浪士の者だが今般外國人を打ちはらふよ付き軍用金が入用だから借用よ參つ之金の在所へ案内致せ(五)私しい金の在所を一向よ存じませぬから其儀ならば其處ゐ案てをりまそる若イ者ゐ聞きなさい(浪)コリヤ其方が存じてをると云から案内しろ(長)當店い本家からの指揮にて金の貯蓄ハ御座りませぬ(浪)愚圖〳〵拔かすと擲つ切るぞサア有も左く土藏へ案内しろ(長)へイーと只得先ゐ立てば後より監介兒い附き從ひ土藏に入りて甲乙見廻し(浪)各々見られよ腐つても鯛どやら此千兩函の裡にどつちりとありまそ(浪)金と〳〵もに此處よある丈けの反物類を持かへりませう(浪)左樣致さうコリヤ若イ者此金子及び反物類ゝ天下の爲めよ吾々浪士が借り受くるぞと云ひつゝ挾かいさぐり呼笛を把り出し吹きゐらせば同じ打扮の曲漢ばら〳〵と顯れ出で六人一緒よ金函と反物類を引攫へ何處ともなく白浪の消て跡なくゐりよけり

## ○第二十四反

涙しみい夕顔棚の下涼みと直實な稼の其れゐらで毒惡無賴の權三夫婦ハ不義よ貪る金銀よて驕奢よ耽る非道の所行玻璃の器よもる洗鯉銀の箸よかけて喫ふ冷素麺川風うけて夏知らぬ坐敷れ樣よい燭を點ー打ち興じたる酒宴の一坐ハ五平政之進(政五平さんの顏を見ると思ひ出すが過般の戰傑盤梅ハ中々巧手りのだぜ(權)然うサ眞實よ雁八も跳足だ(五)雁八とハふ見立てハ役小足だが大哥衆が水戸浪士といふ威し蛮詞ハ了得ゐ盗賊の道ハ盗賊だが己も隨分骨の折れた役廻りサ(權)然うして其後の店の樣子ハ如何です(五)如何の斯のと云つて那の一件の飛脚と國へ立てると直ぐよ本店め支配人が來て閉店と決し

子飼ひ年を問はず奉公人ハ悪皆暇ゐあつて大混雑其れは元來髮期の五平駆く帰と少しも
あいが數年續いた松坂屋の暖簾を芝口ゑ見ぬとは慨いわけサ(政)旨事を云つて居るセ其
暖簾を壓した黒い鼠は誰だらう(權)散々店とあらしたうへ邪魔ゑある朋輩の奴は難癖つ
けて放逐ーー人殺しまでさせた悪黨餘んまり暖簾を慨む風でも無エセ(政)お前のお庇護で
春吉も俱ゑ玉あーーゑする處だつたが宜盥梅で助かつて命一ッを拾へものサ(五)其語ゥ出
ると此五平は實ゑ穴へでも這入り度なるが那の新助ハ源四郎を殺すほど怨むとい思いあ
かつゑ實ゑ彼事ハ閉口の外あーた其代りには店へ手引きー首尾能取つゑ三千兩外ゑ絹布
が五百反隠分大した掃了をさせ已と長九郎六三郎と一人分の千兩で口を拭いたも一件の
謝罪がわるから帳消サ(政)私の方でも横鎗の忠次といふ仲間を連れて三人掛の大芝居衣
裝の損料外の奴等へ分配をして高飛をさせゑ旅費を差引すりやァ格別な仕事でも無エが
殘つてある反物が安く積つても千兩餘マァ那丈けが餘徳だらうネへ權三(權)私等も向
後ハ悪事を廢めて堅氣ゑなり小商法でもする時ゑやァ多少資金の入る事ですから五百と
千と無エ時ハ如何する事も出來やせん其代りゑやァ何日何時御用ゑあつてもお前さん貴

の罪は呑負てあげやそから命の代りの配け代ゑやァ相場外れの安い掃了サ(五)成るほど
然う聞けバ有難い然うーて政さん春吉さんハお壯健かネ(政)久しく便りをしやせぬか變
つた事もありやすまい其れよりハモシ五平さん長九郎や六三郎の口か開り無エやうゑ云
つて置なせへョ(五)サァ其の事でハ私も心配何が哦ゑ持ちつけあい纏めた金が手ゑ入つ
たので毎日の樣ゑ遊んで居るが店ゑ居るうちハ左右くも云はゞ涙人の身のうへで其樣あ
ゑ狂つては疑ひを招くもとゝ昨日も厳しく云つては置いたが如何も那奴等ゑハ困つたも
のだ(政)聞きやァ此節忠次の野郎と一緒ゑつるんで歩行といふが何んだか案られるもの
(半)何しろ今夜ハ此四人が親類交際の酒宴だから五平さんも一獻ふ過ーなさいナ(五)
權三さんの前ぢやァ如何だがお半さんの今の勧めは久しぶりだから其れぢやァ最う一盃
飲みませうと話しゑいとゝ餘念なく盃把つてお半ゑ酌がせ飲む忽ち苦痛の体(五)アイ
タ、ァ、痛へァ、苦ーいァ、痛へ(權、政)如何した〳〵腹が痛へ何か喰合せが悪ゥつたの
だらう(五)ァ、痛へァ、苦しいと悶へる狀を打ち瞰遣り(半)成ほど毒と云ふものァ斯ん
あゑ早く効ものかネチーと聞いて駭く權三郎(權)其れぢや汝が如何かしたのか(半)藏ハ

勿論曖昧なまで穴をわけたる悪戯鼠斯奴の口からハれ無エうち抱籐をされた禮心で鼠取をハ飲ましたのサと云はれて五平ハ仰天し(五)偖とオ、、オノレが(半)權さん締めてゐ去まいヨ(權)ム、其細帶を貸しねエ(政)成るほどお半さんハ宜度胸よあつたネエ(半)當然サ鬼の女房だヨと夫婦齊しく立ち寄つて苦しむ五平の咽喉を一しめ息の絶るをとくと親ひ(權)最う沒つたか脆へ奴だ然うーて此死骸ハ如何ゑやう(政)譯やア無エ裏から直ぐよ水葬禮タ

## ○第二十五反

明治の後ハ橋を架して往來の便と得たれども昔ハ茲も渡ー船か艇川岸より漕出す船の中よハ深編笠よて面どつゝめど立派の武士未だ少年の供を俱ー渡る向の川岸よりして淺草の方へ漕來る船が今武士の乘り居る船とすれ違ふとき少年ハ向ふの船の中を見て(太)ヨ、其方ハ外川ならずやと吾を忘れて立ちあがれハ向さよ乘り居し商人体の男ハ駭き船頭よ金を與へて早くと呼ぶ指圖よ心得涙を切り漕行く後を打瞰遣り(太)先生那れが索る外用と申す私しの親父を殺した奴で御座ります、コリヤ船頭此船を廻して呉れろ(桃)コリヤ〳〵太一郎惱く事ハない今見認しとて御法を犯して復讐おどをなしてハ濟まぬ心配致すな此江戸よ住る事さへ分つたならハ身共が本望を遂げさせてやらうから先づ氣をしづめろ(太)左樣でハ御坐りませうが見す〳〵出會ながら取逃がすハ殘念で御坐りまス(桃)ハテ桃井春藏ご附て居る其方の惡いやうよハせぬ惱な〳〵(太)先生只今の風体を見まするよ何うも商人の樣よ思はれます彼ハ一体内海權三郎と申す浪人脫りの破落者であつたとハ兼て先生へお話を申し上たる通り亡父の妾お京と申す者が彼と不義をおして岐阜へ立越同人の爲殺害され舛た其以前よ密よ認め置し慚愧の文を某者よ托し送り來ーました由ゑ詳く竹醉の素性も知り親の仇といふ事も分りましたが中々容易おらぬ惡黨ゆゑまた何か姿と化けて居ると見えます(桃)面体も身共か能く見覺えさからよハ假令何國へ潛匿るとも遁がす事でハあい安心をしろ(太)何分よも先生の御助力を願ひます(桃)承知致ーてをるサア着いたぞ」此兩個を何人かと聞くよ少年ハ信州下諏訪の伴太左衛門の一子太一郎よーて岐阜のふ京が權三郎の邪慳を憤ほゞ自ら前非を悔ひて太左衛門を殺せしハ同人の所爲なりと一伍一什を書送しよぞ始めて知つたる父の仇俱不戴天の古語さえあれハ

と一道の書を遺して國を立ち退き直ぐさま岐阜へ赴きしに同人はお京を切害し出奔あり後あれば其れより京都大坂と索しうへ江戸へ來たりて聊かの知己あるより南八丁堀なる桃井春藏氏の許へ至り面會を乞ひ所存を明けて願しに元來義氣ある劍客なれば聞屈けて吾家に留め置き只管劍道を教授し居るあるが慶應三年の秋九月測ぞ既川岸にて横三郎を見認けしゆゑ桃井と早速町奉行へも依頼し搜索ふ手を盡しけり

## 第二十六反

二間に足らぬ店頃あがら價直の廉と代呂物に詐欺のあき正直は主個が首に宿々ある神田多町に矮少ある古着太物を渡世にする伊勢屋傳七の表より聲をかけつゝ入り來るは雉子町の消火夫與太郎(與)傳七さん内かヲ(傳)オヽ是れハ頭能くお出であすつたおむら雉子町の與太郎さんが入らしつたヨ(村)オヤヤア頭此節ハ如何あすつたか些とも入らつしやらないから一寸妾しが御無沙汰のお詫旁々上らうと申してとりまするがふ庇護で店が忙しい爲め師に濟まぬ御無沙汰を(與)何うして〳〵無沙汰ハお互サ用も無エのヨヒヨコ〳〵と餘計なふ饒舌を吉ふ行くでも無エサ心の裏に無沙汰せへあけりや一年が二年でも別に



忙しい中を來るヨやア及バ無エ、處で今日來たのハ傳七さんに用があるのサ其用といふハ今更めて云ふでも無エが一昨年測らぞ道三橋でお前を助けて連歸り詳細樣子を聞いて見ると惡る御家人か小旗本の内會師の罠ふ罹つてお店を逐されたと思つたゆゑ蔓ともとめて松坂屋へ度々詫も入れちやア見たが何んだか五平とかいふ人ヨあやゞのあり想で詫言も左右くヨ出來無エ相談ぢちふ前も毎まで私の宅ヨ食客をするも氣兼だらうと京橋の隱居ふ話して聊かながら資金を貸して仕馴れか商買根が正直なお前たけに此近邊ぢやア安伊勢屋と小暖簾あがら聲價をとりあそつたゆゑ私も嬉しく其ヨつけても獨身ぢやア何かヨ不自由であるだらうと其首ハ女ざけヨ私よりハ嗅ア鼻が氣が注き其ふむらさんを女房ヨ周旋した喜びから何卒序いでヨ松坂屋の方へも出入りの叶ふやうヨ爲度に心配をして居るうちとオイ傳七さん那の松坂屋ハ閉店たヨ(傳)エヱ其りや眞實で御座いますか(與)聞きやア何んでも新助とかいふ若衆が朋輩の源四郎と出入のお虎婆アとかを殺し自分も死んだ大噪ぎのあつゑうへまた大勢の浪士とかゞ押込み大した金や反物を盜まるたのを持ち切れぞ國から管伴が出張つて來て店の衆も暇ヨなり遂々店を閉ぢた事と今朝京橋の店

へ往つて詳しく様子を聞いて來たがお前さんも嘸溜飲だらう(傳)其りやア飛んでもない事が出來ました然うして暇なつた人ハ皆如何しましたらう(與)何えでも五平といふ奴が那の店を倒したとの噂があるとサ(傳)其五平の事ハ就いて實ハ貴郎へ御相談ハ出かけやうと存じました其譯と申しますハ此おむらが先年奉公をしてとりました先ハ私が欺むかれた小林といふ旗本だか御家人ざかの妹ふはんの宅で御座りまし

て(與)其イアッ不思議だ(傳)然うして其宅にハ權三郎といふ者が折々入込み亭主氣擬でをりますが其實ハ五平とかいふ者が世話をするとの事また政々進とのいふ者が來て何やら密談をしたりまたは夜る遲く大勢の人が來さり何んだか怪しい宅ゆゑ暇を取つたとの事でそが其五平といふ者の人相を聞きまするハ全く店ふをりました五平ハ相違ないと思ひまもので那のおはんの一件も五平の巧計かと思いれまもといへばふひ

らい話をついで(村)卑妾がをりますうちい五平と申す人を二三度ーか見かけませさまた何處の人やら知りませねど傳七の話を聞きまさと如何も其人のやうで御座いまと(與)成るほど然う所さやァ如何も怪しい實い松坂屋へ這入つた押込みの事ゐつき芝の手先の樣五郎から若し聞き込んだ事でもあつたら知らせて呉れろと云つて居たが其れを話たら何かの種ゐあるかも知れ無ェ其りやァ宜事を聞いた私やァ是れから直ぐゐ往つて來やう(村)貴郎今何もありませぬが一献飲つて(與)ナニ酒か、歸りにドッチリ馳走になりやせう

## ○第二十七反

花ゐ惜む、黄昏の鐘ゐ花ぞ咲く廓の景色い不夜城の這入る若荷ゐ出る生姜と例言もあれと知りつ〜迷ふ其大門を一度潜れば忽ち我身を空蟬のからりと違ふ後朝ゐ早や魂い脱殼して好待遇不待遇の評とり〳〵(長)オイ忠次さん毎もおがらお前い大待遇の樣子であつたぢの左右く那處の舗い三尺帶の廣袖が娼妓相應な客筋と見え吾等の樣ゐ旦那肌い未だ〳〵口ゐ適ぬと見える(忠)長さんがまた不待遇たと見え極りを云つて居るせッりャ然うとオイ六さんゐ前い那んゐ口留をして置くゐ元松坂屋の店の者だと云つたチ私等アお前方を堀留の江州店の人だと各自の敵妓ゐ云つて置いたに今朝私等の娼妓の顔鳥がお前さんい嘘を吐さんス那の長さんゐ六さんい元芝口の松坂屋ゐ勤めた人だと昨夜六さんが花月(六三郎の敵妓あり)さんゐ話しあんーたと云つたゆゑギックリしたが其りやァ花月さんが欺されたのだと云ひ消ちやァ置いたおれどお前も餘ッぽど男らしく無ェ口健な人だせ大きお聲ぢやァ云われ無ェが何んでも此節定廻りが去年の一件ゐ付いて松坂屋の手代と云やァ目を注けて居るから必ず兩人の者にも知らせて置けと過般御徒町の大哥が耳うちゆゑ直ぐゐ兩個ゐ云つてあるのゐ詰ら無ェ事を饒舌たものだ(六)成るほど是れい大失策實い那の花月といふい汐留の或船宿ゐ居た婢で己の顔をペ知て居てお前さんい松坂屋の六三郎さんだと目星を指れ今更違たとも云ひ兼てマァ〳〵然うだちう位の挨拶をして貶と然う云つた譯でもおいがお前さんゐ云われて見りやァ一言もおしサ(忠)昨日も新堀の大哥から此節屢く佐野槌へ通つて居るといふ事だから若し他の事で問をかけられ兩人の口が開いていならない暫時足と抜がいい〳〵と意見が來さゆゑ私も當分野州の方へ出か

けやうと餞別かた〳〵出掛たのだが六さんが松坂屋の手代だと口を辷らしちやァ身の上だかゝ當分廓へハ來ないやうゑ兩人とも氣を注けあせへ(長)五平が死んだ其後ハ他ゑ憑るべき家もないので此長九郎と六さんハお前の宅の厄介ゑなり段々見馴れ聞き馴れゑ覚込んだる強迫騙術此樣子なら師匠がおくても如何か斯うか仕方をあらう(六八)吾等も是れから口健い屹と慎み吉原へも當分足をぬいたうへ若來た處が川岸を替へ勘付かれぬやう用心をやう(忠)其れがいゝ〳〵私等も下谷の大哥ゑ頼まれ那の松坂屋の大仕事ゑ出か

けた後いお前衆と懇意よあつて遊びいするが五平が死だ其から後い身を慎めと云いれたで他よ大した掙了もないゆゑ大分懐嚢もメリゴ來たから田舎を廻つて遊代が出來たなら江戸へ歸る筈だが横鎗といふ渾名のある刑狀持の私等だから是れが別れよあるかも知れ無ニ

分壯健でならう事なら未だ素人氣の抜け無ニ腕で危い藝を去やうより眞面目よ掙了方が宜サ

那の新堀の大哥のやうに二ッあつても三ッあつても足りねニ首の接て居る惡黨でせへ眞面目な店を張つて暮そも身の用心お前も是れから那處へでも這入り等と十露盤を持つが却て徳だ

（長）毎よあいお前の意見成るほど道理千力だ（六）毎も大門と出るまでよ浮氣心ゴの廢まないが

今朝い何んだか染々とお説法でも聽いたやうに悲ーい氣持よあつて來た世（忠）然う所きやア

お互よ安心だ其れぢやア是から平松で一杯酌つて別れると去やう（長）此大門を暫くい潜る所ゑ

ゾ廢めたのハ今朝まであつた茗荷性が大方生薬わなつたのであらう（六）俳ー毎でも此門を出入るい惡くないものだと話ーあがらも大門を出つれバ〳〵取まく人數（手先）御用だ神妙

よーろと繩をかけんとしたりーよゴ忠次い透さぞ（忠）衒無三蹊へ込んだかと遁足出して逃出し行方も知らぞあつゐるよゴ

（手先）ソレ忠次を遁がさねニやう早く〳〵（長、六）ア、桑原〳〵万歳樂（手先）喧ーい御用だ御用ざと彝々繩をかけたりけり

## ○第二十八反

北新堀の桝酒渡世武藏屋權兵衛とは假の名ゆて本名内海權三郎は過ぐる年松坂屋の手代五平と謀合せ曾て惡事の同類なる甲州無宿三五郎今い小林政之進と其乾兒なる横鎗忠次外三人の惡漢と部下に引連れ浪士姿よ身を打扮ちて松坂屋へ押入り去うへ五平等よ案内をさせて三千兩と數百反の絹布類を奪ひ各々徒黨よ分配し〳〵奸婦ふよんい左右くよ五平の在るを憂情思ひ遂よ毒藥を用ゐ殺したるのち松坂屋へ押入りー強盜の詮議嚴重なりと聞くより淺草代地の家を纏み北新堀へ酒舗を開業し夫婦の外よい樽集の小厠二人を傭ひつ〳〵陽ハ清し渡世ゐがら陰よい濁る入れ桝の底の巧計い人知らねバ須臾綱と洩居たり今日も小厠ハ華主廻り店よい主個ゴ帳合ゑまひ煙草燻す折からよ表の方より駈け込む忠次（忠）オ、大哥居なすつたゥ大變〳〵だ（權）大變たァ如何したのだ（忠）他ぢやァ無ニが迂闊注意ろといふお前からの知らせのあつたを兩人の奴に耳うちとして私等も當分野州

へ走やうと餞別旁々三人連れ立ち廓へ出掛て今朝の歸よ大門口を出るや否や御用と
綱ゐ懼り長九と六三い押へられ私等ヤア一生懸命に茲まで報知よ來やしたが那の意
い無ニ兩人だから問ゐかゝつちやお前の事ゐりまた下谷の大哥の事をペラ〳〵喋舌
出してゐるから些とも早く走るがいゝ世と聞くより權二も打駭さ(權)其イッヤ飛ん

でもねエ事た、お半や〳〵(半)アイヨと一室を出づるおはん(半)忠さん委細い聞いたが
最う詮方が無エからお前ハお徒町の大哥の方へ(忠)其りやア合點だ是れから直ぐに駈け
つけるが然うして大哥いと問バ權三い腕叉さ(權)ばれた時よと準備をした持船よ乘つて
流れ次第ゐ走ると覺期い去てゐるから大哥よゐつたら云つて呉ン無エ(半)斯んな事のゐ

いやうよと五平い妾が手料理したから殘の兩人も音と止めて枕を高く爲なさいと度々云つたよ肯無エから足下から立つとり物沙汰慈悲が却つて仇よあつたヨ（權）馬鹿ア云ハ無エ何うせ遲へか速へうちよ御用ゐあるなア知れた事サお前も惡黨らしく無エ其樣あ愚痴を云ひあさんあ特よやア先ごろお厩川岸の渡しの中で見かけた奴い信濃でばらした伴の一子吾の面を見て頻に呼んで居たいお京の一件なり自分の親の仇といふと知つたかも知れねエ何うせ長くい居られぬ軀幹早く走るが身の爲めだ（忠）惡黨たア云へ下谷の大哥い僅かあ扶持でも御家人株私等を捕縛へるやうよ容易い譯よやアゆくめへがお前の宅へい樹酌あ一斯ういうちよも來るかも玄れ無エ早く準備を去なさるがい〳〵（權）準備も何も入るこつちやア無エ物した物をものして返す夫婦い身體と兇器せへありや何處へ行つても自由いーチへオイおはん其抽斗から金を出しあ（半）アイ（權）忠次こりやア少ねエが路費よしな（忠）私等ア一個で走るうへ殊よやア近へ野州廻り路費も何も入ら無エから先しら浪を漕で行く船路の手當が肝腎だせ（半）忠さん妾等よ構いないで持つてお出でヨ（忠）夫ればヤア折角の思し召ー姐公貰つて置きやせう（權）コレ忠次何うせへ此世ぢや逢へれめへと大哥へ傳言して吳んな（忠）承知ーやーた其れちやア隨分氣を注けなせへ最う逢やせんと詞を後に立去るを見て（權）毎も感勢のい〳〵男だ、サア準備しろ直ぐよ走やう

## ○第二十九反

東海道平塚の驛より十八九丁を距りて真土村といふ土地あり當時い下總佐倉の城主堀田家の領地よして戸數い百戸よ足らねども五千石餘の收納ありとか當村外れにお正とよぶ寡婦暮ーの其の家へ親戚の者とて江戸より來し三十路よ近き手弱女ごの食客となり日を送るよ恁る鄙よい人目立つ縹致のみかい衣服さへ華美を飾るい云はでも知るき妓者の果と知られたり未だ肌寒き春の夜の凌ぎよ一献酬飲んで寐んと主個い酒屋へ出で行きし不在は件の女一個が同じ糸とは云ひあがら手馴れー三味の糸ならで繰る綿糸の細けれど太き性根の政之進が繋がる縁の扉口（三）オイ春吉〳〵お春一寸開けて吳ンあ（春）ハイ誰カで す今あけまそヨと立上りて庭ゐ下り切戸を開き顔見て喫驚（春）實よお前い三五郎さん（三）ア、コレ靜よーろ（春）如何ーてマア今時分にと云ひつ〳〵内へ伴へバ三五郎はお春に向ひ（三）跡を閉て〳〵吳んな誰も差合は無エか（春）伯母さんが居るんだけれど今酒屋へ往

つて不在だから大丈夫ダヨ(三)其イッァ何より宜都合ダ、コレ春吉遂々惡事の尻ぐの割れ
己等は一昨日れ夜芝の山内で銀張りの賭奕があつて出かけて行き運惡く悪者取られたか
ら歸らうとして御成門を出ると突然二三人が突當ると直ぐ御用と聲かけ佩して居た大小
を取らうとしたのは手先の奴と知つたゆゑ此方も一生懸命ゑ其場を切り拔け山内から赤
羽根門を出て二本榎の猿町の忠次の宅へ寄つて聞きやァ弟の話ゑ忠次の野郎と一昨日の
朝伊徒町の己等の宅へ來る處を御用ゑなつて引かれたが權三夫婦は好都合ゑ走つて網の
目を洩れて己等は株ぐのあるだけゑ組頭へ届けをして手當ゑなつた一件だが折よく三日宅
をあけ遊び廻つたが身の幸ひ然し江戸ゑゐ居られ無エから大山街道へかゝり双子を渡り
昨夜い溝の口の龜屋ゑ泊り漸と茲まで遁げて來たぐ是れから暫し京坂へ高飛ンする了簡
ゆゑ無事ゑ歸るか歸れぬやら夫れで一寸暇乞ゑ來たのだと聞くゑ一々駭くゑはる(春)其
れい能くマァ來てゑ呉るだ妾もゑ前の知つての通り新助さんの爲めゑ殺されやうとした
が繋いでゐつた船ゑ取り着き漸と命を拾つたゆゑ江戸ゑ居てい那の人ゑ出會また何んな
目ゑ遭はうかと思へゞ怖さゑ居たゝまれぬ其夜のうちに親をやとひ當村ゑ居る伯母さん



を憑つて來て仔細を話し匿れて居るうち倩々と思ひまいせば從來ゑ造りし罪ぐ恐ろしく
其れゑつけていゑ前の身も何うぞ眞面目な人ゑゐり夫婦ゑなつて俱稼ぎ今まで人ゑうけ
たる難儀の萬分一でも滅するやう悉悲善根が爲たいと思ひ度々手束で云つていゑげたが
返事のないい改心の出來ない事と諦めるゑつけ眞一度逢つて諄々と意見をしやうと思つ
て居たが其れぢやァ遂々然ういふ身に(三)爾の口から左樣云いれりや何んだか極りが惡
くなつたぐ權三郎ゑ賴まれて那のおはんとゞ妹ゑ傲立て松坂屋へ乘り込み傳七へ云ひ分
つけて二百兩を強迫て取つた其原の人形遣へい狸の五平其れから那奴と懇意ゑなり果い
打扮もあら掙了の三千兩と絹布類を攫つて逃げた大仕事も五平いゐとんが毒を喫ハせ片
づけたので宜ゐつたが長九六三といふ兩個の奴が吉原通ひで耳ゑなり遂々ばれた惡事の
尻尾權三夫婦い北新堀で眞面目ゐ稼業い爲て居たが大方平生の話し通り佃の沖ゐ繋いで
ある所有船に乘り遁げたのであらう己も爾が云いなくッても惡い事だと氣が注いたい度
々なれど蹈ん込んだ此泥足い何年經つても洗へ落せぬ汚れた軀幹毒喫や皿と長た横道今
い遁げても到底は命を納めゑやあら無エと其分別はしてゐらァ(春)妾が斯んな事をいふ

とお前よ愛想が盡たゆゑと思ふであらうぞモシ三五郎さん那の權三さんは妾の爲めには現在伯父の敵でそヨ(三)エ、其りやまた如何いふ譯でと尋る折ゝら表口より(正)イヤ其故は妾が話しませうと云つゝ這入る主婦のお正(正)おはるが久しうお世話よおつた三五郎さんとやら妾は此女の伯母お正といふ者お初よお目よゝります(三)其れぢやお前さんは春吉の伯母さんでそか(正)委細の樣子は戸を洩れて聞くともおしに聽きましたが姪の爲めにい所夫ふ齊しいお前さんゆゑ向後い妾が引きうけ世話をーませう遠い土地へ走らずとも暫時茲にお匿れあさい(三)了得い春吉の伯母さんだけあつてマア何分願ます然うして今所きやア私等の兄弟分權三郎が春吉の伯父を殺したとやら一体其りやアか何いふ譯で(正)其譯といふいマア聞いて下さい此女の父親い妾の兄よて元い甲府の九十郎といふ者兄よい男の子が一人ありましたが早く女房よ死別れ男の手一ッで育てる事も難澁ゆゑ鮴澤の彌七といふ者へ親知らずよてやりし間もなく江戸へ出た後緣あつて此お春が母親ゝ聟となり其の身の定まつた趣きを妾の許へ知らせて來ましたが當時い妾もまだ所夫重助どのとゝもよ當眞十村よをりましたなれゝ所夫い淺草代地の吉野屋といふ質問へ



雇よ住み込み正直律義の人なれゝ店の萬事を委せられ當村にい重助どのゝ實母を遣して妾も江戸へ行きしうへ兄の許へも訪れもきましたが此姪の前でい云ひ惡くけれど兄の後妻い現在娘ゝ藝妓よきやうといふ人あれゝ所夫や妾と蒼蠅がる擧動もあるので其後い打絶ゑ音信もきないうち兄い病死をしたとの報道よ愈々疎遠となる折から所夫重助い店の用よて五十兩の金を持ち急に横濱へ赴く途中鶴見の並木で泥劍よ出逢ひ金い勿論命まで奪れて敢ゑくゑゝりましたを憫然と思い邪慳お主人が此五十兩を假へよと日毎の催促據ところなく些少の衣類調度と主人へ渡し世ゑ愧かしい乞食となり下がつての艱難い何卒所夫を殺したる其盜賊を搜し出し度女の念が屆きしゝ或日淺草の奥山よて妾へ錢ゑ與れたる男の所持せし財布い見覺ゑある所夫の實母ご手織の縞柄然も妾が縫裁た烈地丁腹横濱へ赴く時五十兩を納れて持參をしたと思ひ出ーてい其人こそ正しく仇と思ひまーたが連の女い元主人の吉野屋の貸店よゐる圍妾お半といふ事のしれてあれゝ篤と穿議をしたうへよ訴へ出るも遲かちじと立別れしうへ代地へ行きおはんを圍ゐー旦那を听けど何處の人とも判然よ知れずおはんどのへ直々よ問て見やうと思ひましたが迂濶ゑ云ひ出し若

し違つてゝ先の人へ分疏なーと思ひますゆゑ慌る心を押ーつめ日を送るうちおはんの旦那ゝ新橋松坂屋の手代傳七とかいふ人と聞き奥山で見た人の姿態はお店の衆とゝ見えなんだが是れとゝ別な人なるか右も左く逢つて尋て見んと松坂屋へ行き樣子を聞くゝ其傳七ゝ不都合あつて暇を出して何處へ往つたか行方ゝ知らぬと店での噂原來ゝ愈ゝ傳七とやらこそ所夫の仇であつたかと直ぐゝ當地へ立歸り姑にも告げ見通しか遺憾話ゝ日を暮すうち姑女は苟且の病が根ゝて果敢なくゝ妾も他所へは出られぬ身ゆゑ其まゝ家ゝを守りすれど何卒所夫の仇とと思ふ處へお春が來て松坂屋の手代の爲めゝ云々と聞けゝ聞くほど怖しい如何ゝ流れの唄女でも其樣な噪ぎを惹起すとは天の免さぬ罪造りと厳しい意見をーまーたゆゑ此姪も改心しまーたやら以前に變る炊の業生れ變つて來たのかと疑ふまでゝ眞實な働き昔語りの其うちゝ血筋ゝあふぬど姪と思へゝ彼の傳七の事を話せしゝ傳七さんといふ人は二三度逢ふた事もあれど中々其樣人でゝあい其財布ゝ權三郎といふ三五郎どの〳〵朋輩が持つて居て宅の婢ゝ呉れた品と同じ手織の縞柄と聞く容貌ゝ奥山ゝて出會つた男ゝ相違なく特ゝおはんの情夫と云ひ從來惡き所爲のある人あれゝ所夫と殺し金を奪ひ一追剝も權三郎とゝはじめて知り訴へ出でゝと思ひゝまたれど爾うゝる時ゝ蔓ゝも蔓ともつれゞ咲て義理ある姪の此女ゝかゝる難義もと思へゝ無念をじつと堪へ知らぬ昔と諦め居る心の裡とコレ三五郎どの察してお前も向後は惡事を廢めて此お春に安心をさせ正しい道と稼いで下さい頼みまする(春)血筋であいと義理を思ひ妾の難義ゝならうかと伯母さんが有難いお辭モシ三五郎どの何卒改心して下さい(三)始めて聞いた身の上話併し今更乃公ゝ惡事を廢めた處が百姓業や眞面目な稼ゝ出來無ェ身分其れよりやァ爲馴れた惡黨何うせへ長くゝ無ェ命太く短くやつゝける積りだオィお春爾も斯んな田舍に燻つて居ゞ花を咲かせて贅澤しろ(春)今も今とて頼ひ下から其樣な無法な事と云ゝずお前ゝ素より權さんも改心をして伯母さんへ詫をそるやう勸めて下さい(三)べらぼうメ五十兩位の目腐金で殺した奴儕の親族の者に詫事をしてあふものか其れよりやァ權三郎ゝ汝を仇と覘つて居る寡婦があるから後腹の痛まねェやう殺てしめへと已が吩附てよとすからオィ伯母さんお前も覺期をして良人の傍へ行くがい〳〵と思ひがけぬ惡体口お正も憤とし(正)其れでゝ妾が是れほど云つてもお前ゝ改心をる氣ゝないか(三)改心

處かお前の良人を殺した仇の權三郎い己の爲めよい弟分すりやァお前とは仇き同士弟お代つて己れが斯うそると佩ーたる刀を拔きはなせばお春は駭き(春)待たしやんせお前は伯母さんを殺す氣か(三)知れたこつだ(正)お前の樣な惡人の手よかゝらぬ切れるものお ら切るがよい(春)アレ伯母さん危險い退がしやんせ(三)ェ、面胴なコレ伯母さん權三郎を斯うーて切るのだと云つゝ刀把り直し己れの腹と貫けば(正)ヨ、自分お妾の手を持ちそへ(春)自分の腹へ突き立たのはと訝る兩人三五郎は苦しき息をはつと吐き(三)お墓りーや伯母さま何を包さう私は甲州鰍澤の彌七方へ貰てれたお前の兄九十郎の悴幼名九の助で御坐りますと名乘に喫驚(正)ェ、、、、(春)其れでは胤腹違ふと云へ(三)オ、名乘れば兄妹(正)伯母甥かと須臾呆れて辭あし(三)前非を悔む三五郎が今ぞ現存伯母よ逢ひ眞身の意見は天道が死ねよと敎る慈悲の責めモシ伯母さんコレお春己が罪狀消滅の爲め從來盡した惡事の顚末書取り置いて死んだ跡よて地頭へ訴へ出ーて呉をと苦痛あがら も身の上よ爲せー惡事の物語り一伍一什を書き取らせーい了得健氣の擧動なり

## ○第三十反

烏波玉の闇よ黑白も見えぬ夜の沖よ怪ーや星かとも疑ふ光りの見えたるは正しく浦賀の關こゆる白浪の徒か然あくとも此浦役所へ寄せずーて規則を破る船あるべー各自急き追つ蒐けよと見張の者が揮指よ順ひ二艘の小船よ十人餘りの捕吏は乘り込み四挺櫓の腕をかぎりと漕ぎ出だーぬ」(水夫)佃ゝ發ゝ時の逗風あら二百里餘の海上れ譯あく兵庫へ着きやせうよ生憎な暴風續き併ー此浦賀沖と乘ゝきりせへすりや最う大丈夫お船足ですヨ(權)毎ものやうよ浦役所へ寄つて證文見せると違ひ其浦役所の關を破り遁げる身分となつたのも積る惡事の報が來たのだ(半)權さんお前は氣の弱へ事ばかりお云ひだネ江戸ばかりが日い照るめへー京坂筋から長崎まで掙了をした上唐天竺へも走る心あおなりなチー(水夫)成るほど姐公のいふ通り斯ふ乘り出して遁げた日よやァ逮捕のゝゝる氣遣いなし大哥大船よ乘つた氣で居ゐせへと話しのうちよ權三郎い沖の方へ耳立て聞き(權)何んだか人聲がそる樣だが分ら無ェかと云はれて氣の注く水夫等窓の戸あけて透ーあがら(水夫)モシ大哥頻ゝ漕いで來る船がありやすが若し浦役人ぢやァ在りますめへか(權)先刻汝ごの船樣で烟草ゝ飲だ吸殼をポンとはたいた海の中其の火の光ゞ眼張た役人の眼に注

きかせぬかと己やア心配をして居たが能く浦扱けゝ灯を消しても烟草の火でやられると云ふ話を聞いさから殊ゑ寄ったら捕吏だせ、おはん灯を點ろ(牛)お前捕吏なら猶の事灯を點せ走るが宜せ(權)べらぼうメ陸を駈け出す樣ゑ早速ゑ逃げられるものか此風空で取卷かれてゝ如何をる事も出來ねェから灯を點て尋常ゑ闘を破つさ船と名乘り捕吏の奴を斬殺ー惜はぬさでもやりて見るのだと性根を据し所夫の辭ゑ牛も合點(牛)妾もお前も危くなつたら豫ての通り船ゑ火をかけ(權)ム、夫婦一緒ゑ魚の餌とあるのだオイ若へ者、茲が一生懸命だ準備をしてぶッちめろ(水夫)合點だ〳〵と皆身準備あす折こそあれ早潮寄せる捕吏の船權三郎い甲板ゑ突立ち(權)ヤイ汝等ハ浦賀の本葉手先だナ己やア内海權三郎といふ闘破だから船へ足でもかけやアがると片ッ端から蹈殺すぞと呼ぶ聲聞くより捕吏の首領(首吏)無禮の過言彌ゑ權三郎だソレ乘込め〳〵と皆々船ゑ乘り徙れバ水夫ハ各々身搏なし(水夫)ソラ來たぞ負るな〳〵(首吏)先ハ及物を持つて向ふとも殺さぬやうゑ生捕が肝腎だぞ過ちなきやう注意めされ、水夫どもの四人は召捕たとな、よし〳〵那め權三郎といふ奴ゑ女房がある筈ぢや胴の間の方船底ゑ穿鑿ごつしやいと双方烈ー〳〵討ち合ひーが天網洩れず權三郎は遂ゑ縄ゑぞかゝりける(首吏)ナニ權三郎を生捕たとゞた〳〵海中へ飛び込まれては大變風ぐに小船で送護る方が宜らーい、サア殘りの人數は女房を捜ーめされといふうちかはんは兼ての覺期(牛)其れぢやア權さんもお手ゑあつたか此上は武士の娘らしう三尺高へ木の空で變つた色の死首を晒されぬやうオ、然うだと艦の方へを駈け行きーが貯へ置し火藥をば火鉢ゑ投入れ忽ちゑ燃出ー煙りの其中ゑ懷劍把つて咽喉を貫き果敢なく最期を遂げたるハ惡の報と知られたり(捕吏)ソリヤまそ女の聲がコリヤ堪らぬ艦の方がも燒け出したぞヨ、正しく女が自害の体ソレ殺さぬやう斯う燃出してハ所詮寄り附けぬ孰れも小船へ避けさつしやい女を殺してハ殘念だが本人の權三郎ハ此の通り生捕たれバ安心だ(權)お牛能く死んだ今に己も跡から行くから地獄の門で待つて居ろ(捕吏)鬼の女房ゑ鬼神とやら中々ゑ氣丈な女だ

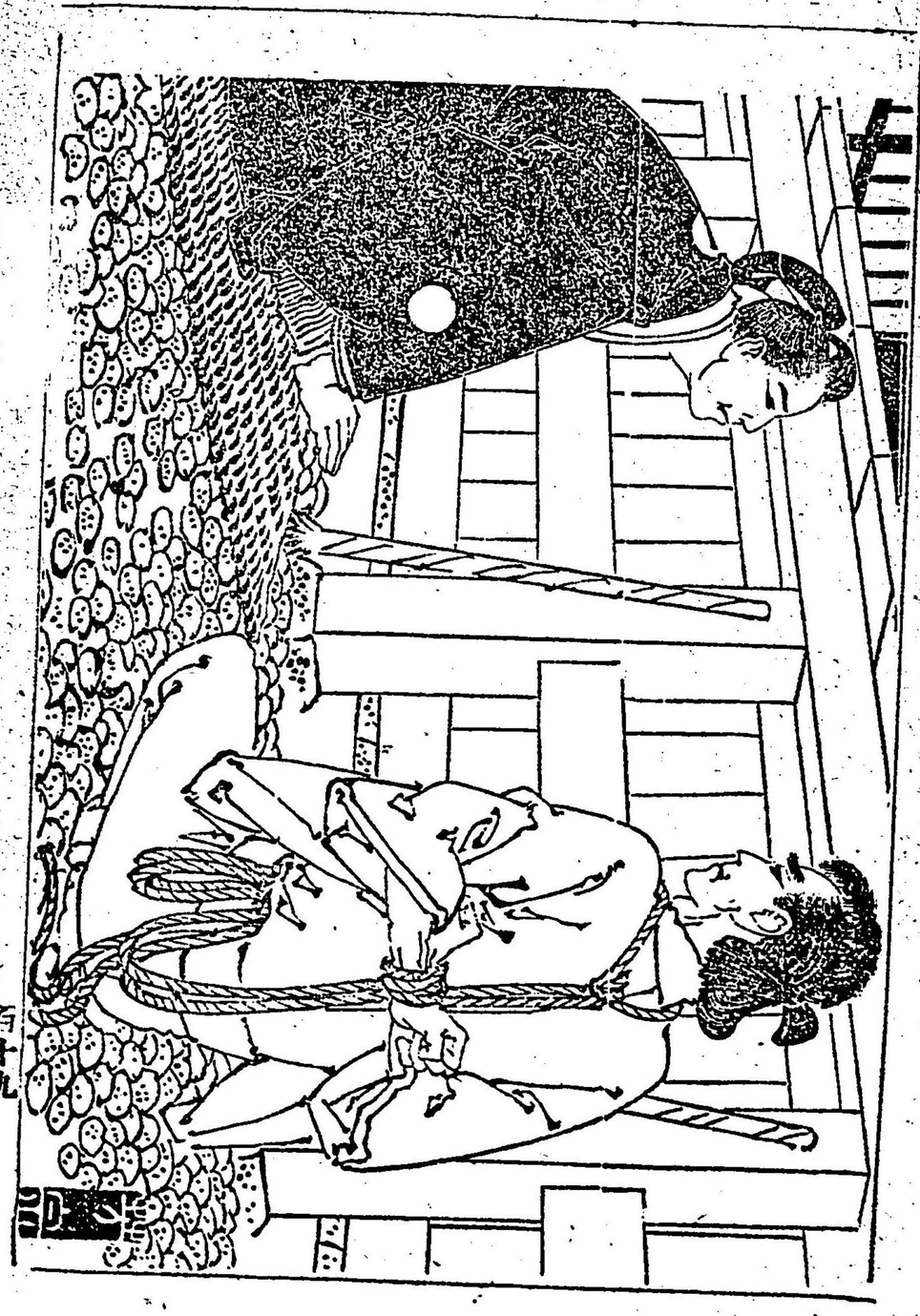
## ○第三十一反

鬼賊内海權三郎も竟ゑ惡運盡たるゑや相州浦賀ゑ於て召捕とあり當時の同奉行土方出雲守自身ゑ是れを紀問去たるゑ包む事あく從來の犯罪逐一招丁せしゆゑ其處分の儀を江戸

表へ伺ひ申なうしゝ拵所用あつて伴太一郎を同伴し該地へ來たりし桃井春藏が測らぎ一日出雲守と談話の砌太一郎が身の上の事を語りしより其賊ならば先頃當浦役所よ於て召捕取調濟よて今よ其處分方を江戸表へ伺ひ申なりとの土方が噂に桃井ハ早速此趣きと太一郎へ云ひ聞かせし後雖て一通の願書を奉行所へ差出だし沙汰を竢ちしよ數日を經て伴太一郎及び其師桃井ヾ召喚となり出雲守ハ辞を更め(出)信州下諏訪在伴太左衛門一子太一郎(太)ハッ(出)其方前年父太左衛門と内海權三郎の爲めよ殺害され其復讐を思ひ立ち遍歴中右の權三郎事當役所の手へ召捕とありしゞ聞き復讐致し度願と上げしが確と左樣か(太)御法の禁せられし所とハ存じながら何分ふも俱不戴天の怨恨止み難く願出でまして御座ります(出)桃井春藏(春)ハッ其方の門弟なるよし申し立つるが相違ないか(桃)如何ふも拙者門人ふして平牛父の仇を報ひ度趣きを申し唱をりましたが尤も品行も方正なるうへ其正質も純良ある者に御座りまそ(出)左樣かコリヤ太一郎其方の願道理ふハ聞こゆれど權三郎事ハ當浦賀役所乃ち海上の關所を破りし大道ある者なれば願に對し容許ぞ事ハ相成らぬ既よ同人の處刑方ハ閣老へ伺ひ中の事よして今更私しの取計ひハ出來難し併し今日ハ權三郎をも召喚ぶたれば其方が鬱を散するまでに突會せんソレ、權三郎を(同心)ハッ、權三郎引出しました(出)コリヤ權三郎其方ハ此少年を存じをるか(權)如何にも存じとりまそる是れハ信州下諏訪伴太左衛門の悴に御座りまする(出)先頃予が訊問の砌太左衛門を銃殺致したる趣きを申し立てしが緊と其れよ相違ハなかろうの(權)自身の招丁何しふ僞りを申しあげませう(出)此太一郎ハナ目下桃井春藏の門よありて其方が當浦賀役所へ召捕とありしを聞き今日復讐の儀を願出たのぢや(權)すりや太一郎よハ那の復讐を(出)太一郎差許すから申ー分あらば權三郎へ申せ(太)有難く存じ奉つりまそヤイ人非人の權三郎科ハ自白をなす程故一々覺あるならんが能くも父ふ撃殺せしよふ假令天下の御法よて吾一刀が汝の首へ充る事こそあらぎとも御奉行の厚意ふより只一言の怨を述ても父尊靈へ孝養足れり諄々も弄惡人メ(權)如何やうよ申さるゝとも決して無理とハ存ぜぬなり恩ある人を撃殺しまだ其れのみか密通した女を切ッて立ち去りし大惡無道の此内海大網漁れぎ斯の身となり處置の死を竢つ事なれば足下も怨を散せよかし此ほど新人の科人より聞けば足下も知つたる吾儕の同類政五郎事甲州の三五郎も前非

を悔み其土村なる伯母の許よて自殺せしとの話ー權三郎い罪重くお手よかゝつて厄介と
なるい重々不屈極る所爲其れよつけてキ、足下の父の仇を斯いふ權三郎と承知ありしい如
何なる故ぞ(太)オ、其れこそいお京どのより其身の慚愧よ書添て送りし文よ詳しく記せ
タ(權)其れでゝ乃公が殺して持ゝ偖う足下の許へ告げたる後か(太)如何こも其れゆゑ





小生ハ直ぐさま岐阜へ立ち越えしあれど最早汝ハお京を殺し同地を去つたる後なりし（櫂）窓に天道ハ曇りあく誠を照し玉ふゆゑ廻り循つて足下よまた茲で乃公を遇ハせしあらん然りあがら此櫂三郎ハ關破りの大罪あれハ足下が親父の仇なりとも私しの遺恨を散すハ難かるべしと其れのみ心中察し申す（出）假令自身よ手を下さぜとも天下の御法よ處せらるゝ者へハ亡太左衛門の怨を散ぜべし最早多辨を費すあソレ櫂三郎を牢内へ引け（桃）閣下の御厚意よより門人太一郎へ滿足を與へ拙者よ於ても有難く存じ奉つる（太）嘸くゝ父が地下ゐありて欣び居るで御座りませうといふ折柄よ與力ハ駈つけ（與力）只今江戸々表より御判到着 仕りました（出）左樣かコリヤ、兩人とも退出致せ（桃、太）ハ、

## ○第三十二反

有恁しかバ浦賀奉行土方出雲守ハ江戸表よりの御判狀到着せしと以て之を披閲するお内海權三郎ハ重罪の者ゐれバ江戸表へ差廻すべしとありけるよぞ早速其準備ありたるうへ曾て復讐の儀を願ひ出でし伴太一郎へも此趣きを沙汰せられ此一件の者江戸表へ送りとなりしハ慶應三年夏六月よして是より再び南町奉行に於て糺問ありしが同人が浦賀よ於て招丁せし廉よ毫も相違ゐけれバ遂ゑ同年八月下旬鈴ヶ森よ磔の刑よ處せられぬ是より先桃井春藏氏より太一郎の事を町奉行へ上申ありしかど元來當時よあつて差許さるべきよあらねバ願意ハ聽屆よならざりしも罪科も重き磔の刑よ處せられたる事ゆゑ太左衛門の恨も散じ得度しさるや疑ひあしと稍喜びの色を顯はせり話頭題眞土村なる三五郎の情婦お春及び同人の伯母お正よりは三五郎が最期の砌聽取りて書認めたる一書を添へ是を地頭へ差出し沙汰を俟つ折から慶應四年更まり明治元年の春となり幕府瓦解よ引續き代は王政の德よ化し萬事維新の治政を布かれ特よ 御即位よ付き大赦を仰出だされしかバ甲の舊惡乙の隱事も全く沙汰せられざるの恩典よより此事件よ關係し者どもハ世へ公けよ出づるを得たり然れバお春も伯母とゝもよ横濱よ移りて再び三筋の糸よ憑り町藝妓となり稼ぐ折ゝら當時横濱よ名も高き某甲よ身購され妾とあり其後東京よ來たりて木挽町よありしが明治七年の頃故ありて同家を辞し今は淺草福井町よ或者の妻とあり以前尖し心の角を折りて誠の道を蹈み安かよ世を經營居たり亦伴太一郎は其素志ならずと雖も桃井師の厚誼よより適れの劍客となり戍辰の際よハ一旦脱走の幕兵よ加りしも程なく

歸順して官軍となり此役畢りて後故郷に歸り專ら農業の事に勉勵し當今の長野縣農業委員となり國益の擴張を企圖すと云へり亦神田多町にありし傳七夫婦は益々家業も繁昌なる折から故郷松坂より家名の事につき呼戻しの便來たりしに餘儀なく多町の店を去まひ夫婦倶伊勢國へ趣きしい維明治九年の事なりとか樂天が謂ふ行路の難い山にあらず水にあらず只人性反覆のうちにありと元此松坂縞い中根の娘かはんが細糸の絹に稿を起せしも中頃木綿絲ノ太さあらくれあさわ選り筆の毛織もかぼろにて其組糸さへ定まらず屑糸のみだれ最と多かり爾れども地合の善惡に努ず因あり果あるを以て一目にして之を鑑定するは人皆固有の精神あれば なり記者は力て善き糸に善き綿柄を織らんとすれど未だ智覺の機能なければ蠶の糸の滑かなる凱障りよき小袖を開覽する事難く木綿布子のギス〳〵と御氣に召さぬも多からんが所は只仕入れの品に寄ると價値相應の御評判を乞ふ

松坂縞好新機織 尾

明治廿二年二月六日印刷
明治廿二年二月八日鏤刻出版
定價金二十錢

鏤刻兼發行者 長野縣平民 山崎杲平
東京々橋區銀座一丁目八番地

印刷者 東京府士族 吉田錠次郎
東京神田區淡路町一丁目壹番地

大賣捌

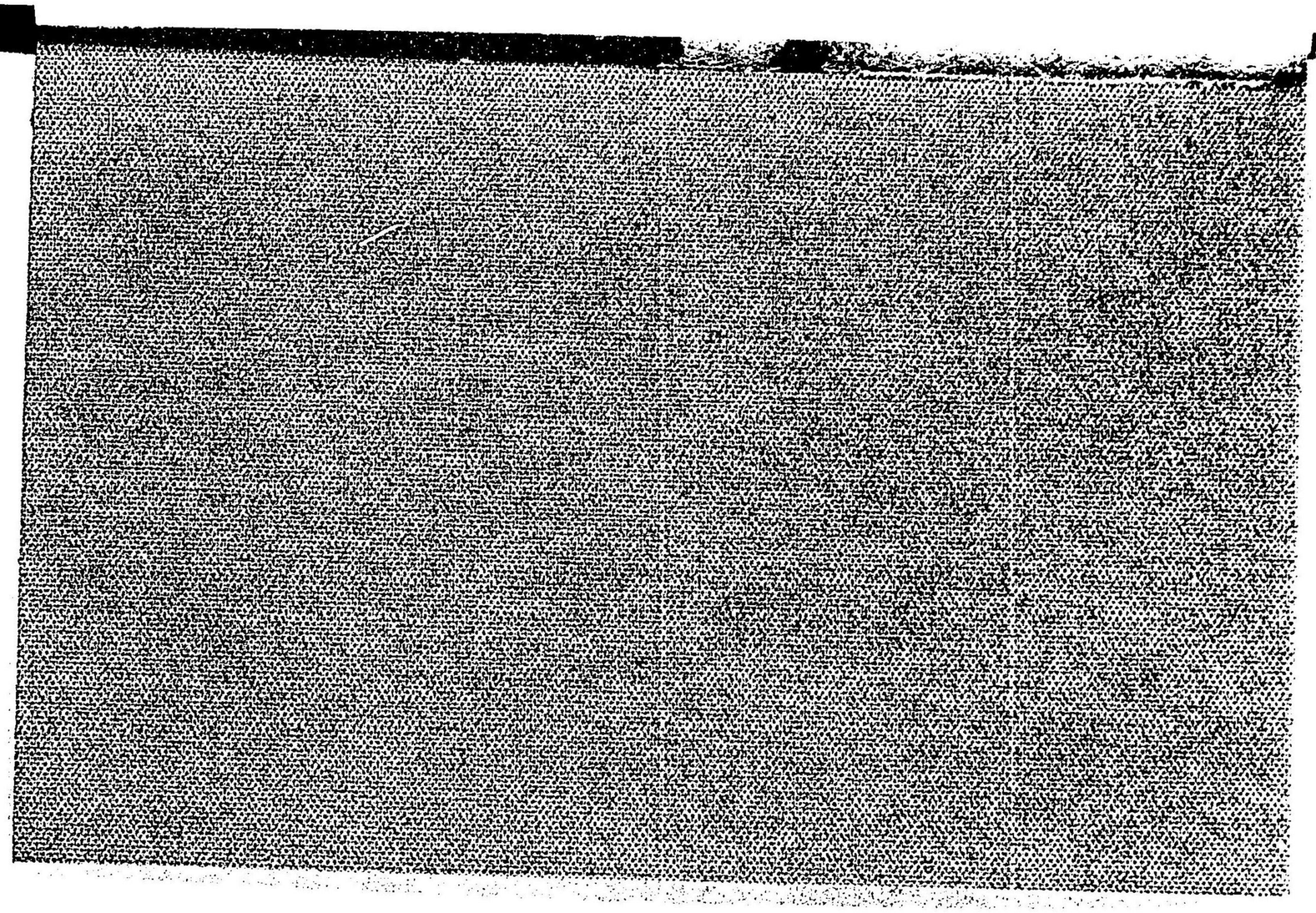
東京淺草區三好町
大川錠吉

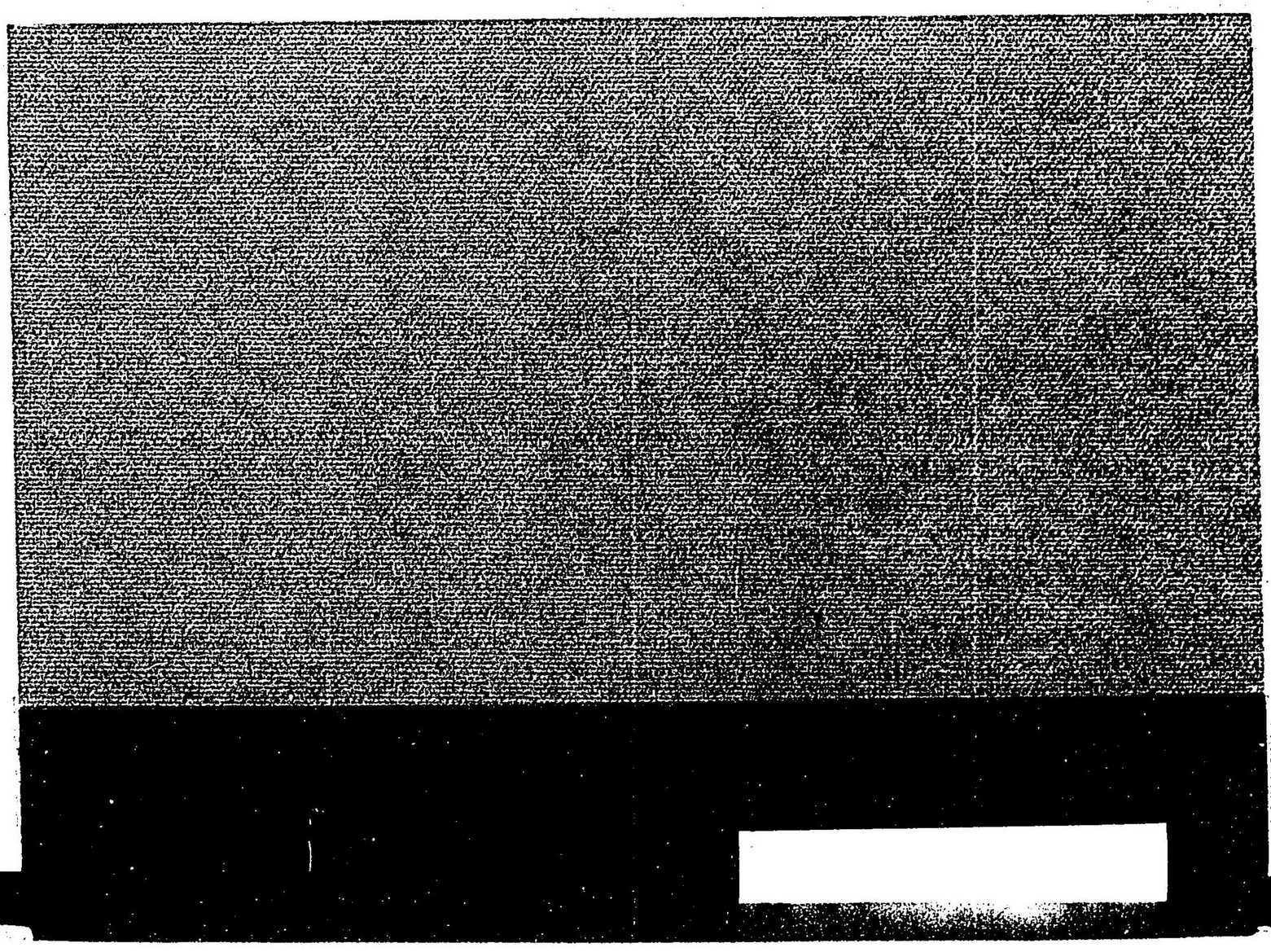
同 神田區富山町
開進堂

同 日本橋區通四丁目
明進堂

信州松本大名町
大川錠吉支店
小岩井禎十

賣捌全國各書肆





特69
289

松坂縞好新機織

国立国会図書館

205329-000-9

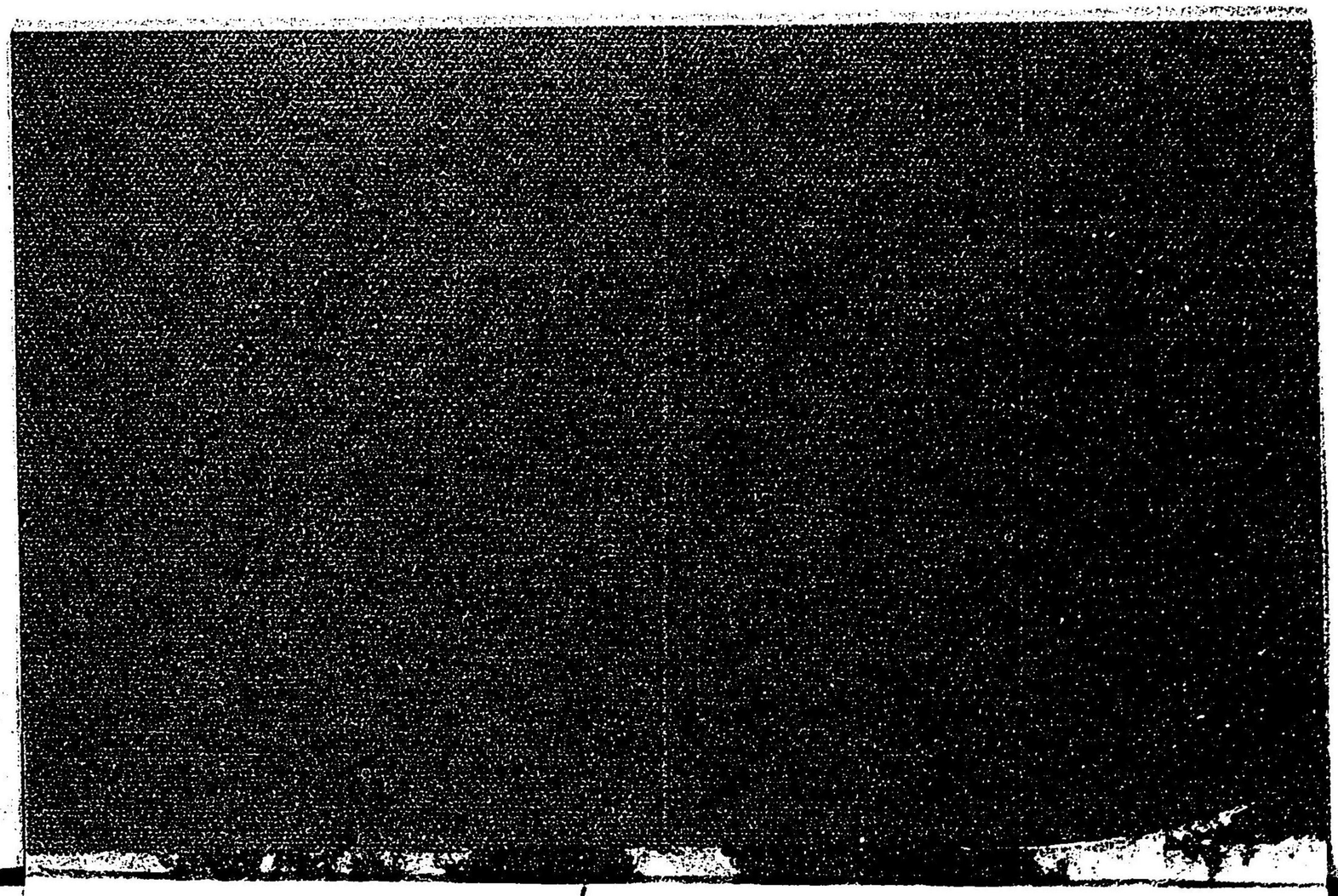
特69-289

松坂縞好新機織

山崎杲平

M22

EDV-0506



特co
0032